



天文学者が1を知ると、宇宙は10の謎を 投げかけてくる

研究者たちが見ている宇宙の最前線

田中雅臣・津村耕司 編，共著者9名

河出書房新社 四六判 260頁 本体1,980円+税

解説書
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

研究者であれば、少なからず「発見」の瞬間に立ち会った経験があるはずだ。理論でも観測でも、世界で自分しか知らない事実と直面し、興奮で眠れずあれこれと想像を巡らせ、シナリオを構築し検証していく。この「Eureka!」の瞬間を含むプロセスにこそ、研究の醍醐味がある。

「もし、そんな経験だけを集めた本があれば、最高にエキサイティングな知的探検記になるのではないか」

などと私がぼんやり考えていた折に出版されたのが、本書『天文学者が1を知ると、宇宙は10の謎を投げかけてくる』である。

本書では、現代天文学の中でも最もホットな9つの分野を取り上げ、日本を代表する若手研究者たちが、それぞれの専門領域を解説している。各章では分野の導入に続き、著者自身が「1を知った」瞬間の記憶が、熱く、あるいは淡々と、それぞれの個性を反映した文体で綴られている。9人いれば9通りのスタイルがある。そのバラエティ豊かな語り口の違いを楽しむのが、本書の醍醐味といえるだろう。

限られた紙面で最先端の研究をコンパクトにまとめるのは、至難の業だ。1冊の本を9分野で分け合う構成は、著者一人ひとりのページ数がとても少なくなることを意味する。執筆には相当な苦勞があったはずだ。一文一文の行間には、語りきれなかったドラマが詰まっている。もし難解に感じる部分があれば、ネットやAIを活用してそれを読み解いてみてほしい。少しの探究心を持って

向き合うことで、本書の面白さは何倍にも膨らむはずだ。

研究に終わりはない。1を知れば、その先には無限の広がりがある。将来展望として語られる各著者の見解は、非常に示唆に富んでいる。万物を包含する宇宙を相手にする天文学は、気が遠くなるほど広大だ。本書の多様性そのものが、現代天文学の広がり象徴している。私自身、高速電波バーストや超高エネルギーニュートリノについては、本書を通じて多くの学びを得た。

さて、冒頭に記した「Eureka!の瞬間を集める」という試みは成功しただろうか。

結論から言えば、現代天文学のエキサイトメントを存分に凝縮した、素晴らしい読み物に仕上がっている。ただし、内容は彩り豊かな「幕の内弁当」のように盛りだくさんだ。重厚なコース料理を期待する向きには、一章ずつのボリュームに「もっと読みたかった」というもどかしさを感じる部分があるかもしれない。

しかし、その「もっと先を知りたい」という渴望こそが、天文学者が次なる10の謎を追いかける際の原動力そのものなのだ。あえて語り尽くさないことで生まれた余白が、読者をさらなる探求へと誘う。お二人の編著者の「はじめに」「おわりに」には、そんな読者の心への細やかな配慮も感じられる。

自信を持ってお勧めしたい一冊だ。

田中 壱 (国立天文台ハワイ観測所)